

FD

2016

京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —

2016 Mutual Faculty Development



2017年3月 京都大学FD研究検討委員会

目次

- 1 ごあいさつ
- 2 全学教育シンポジウム
「データと理想にもとづいて考える京大の教育改革 ー入試から大学院教育までー」
- 5 大規模オープンオンライン講義（MOOC）
- 9 オープンコースウェア（OCW）
- 10 京都大学におけるICTを活用した
教育を推進するためのポータルサイト（CONNECT）
- 12 プレFDの取り組み
- 14 新任教員教育セミナー
- 16 教育制度改革に関する勉強会・研修会
- 19 各部局の取り組みの紹介

ごあいさつ

FD研究検討委員会委員長 飯吉 透



FD研究検討委員会は、2006年に研究科長部会の下に特別委員会として設置され、高等教育研究開発推進センターの協力を得て京都大学のFDを企画・実施してきました。本報告書は、これらのFD活動の概要を学内の皆さまに具体的にご紹介するために、毎年作成されているものです。

大学設置基準の改正によってFDが義務化されてから10年以上が過ぎ、また本委員会も10周年を迎えました。本報告書の中でも取り上げられているように、本学においても、本委員会や全学・各部局の努力によってFDに関する様々な取り組みが継続的に行われており、FDは制度的には一定の普及と定着が図られてきました。

我が国においてFDが義務化された当時は、授業改善や各教員の教育力の向上という、どちらかと言えば「ミクロ的」な側面に関心が集中する傾向が見られました。しかし近年は、GPA、キャップ制、コースツリー、新たな入学選抜方式、単位互換、ジョイント／ダブルディグリー等の導入、3ポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプロマの各ポリシー）の改訂や高大接続、ICTの教育的活用、さらには種々のデータに基づいた大学教育力の強化等、多種多様な教育制度改革や教育改善に取り組むことが、学科・学部・大学院・全学など様々なレベルにおいて求められています。そのような中で、本学におけるFDも、これまでの一次元的なFDを延長していくだけでは不十分であり、教職協働さらには学生をも巻き込んだ教育改革・教育改善プロジェクトを通じた、多面的・多角的な展開が必要な局面を迎えていると言えるでしょう。

次章でも報告されているように、2016年度の「全学教育シンポジウム」は、本委員会の企画によって「データと理想にもとづいて考える京大の教育改革—入試から大学院教育まで—」というテーマで開催されました。海外の大学と本学のデータを通じた比較や、本学においてデータにもとづいた教育改善にこれまで取り組んでいる幾つかの部局からの実践の成果や現状に関する報告を受け、今後の本学における教学IRの可能性、課題や展望等についての議論や意見交換が活発に行われました。教育のプロセスや成果が可視化・データ化されることで、普段学生たちの学びについて漠然と感じられていたことや教育改革・教育改善のさらなるチャレンジや次のステップが、より具体的に顕在化されることは勿論重要ですが、そこに教育的な理念やビジョンが掲げられていなければ、まさに「木を見て森を見ず」になって

しまうということをあらためて認識し、教職員同士が部局を越えて互いの意欲的な実践から学び合う良い機会となったように思います。さらに、2015年度の同シンポジウムで、「本学の各学部における特色ある教育」というテーマが取り上げられたことに続いて、今回は本学の大学院教育における先駆的・特色的な取組についても、幾つかの研究科やプログラムから興味深い先駆的事例が報告されました。

京都大学の教育における重点的取組課題の一つである「ICTを活用した教育の推進」については、2016年度MOOC（大規模オープンオンライン講義）8講義が開講され、海外から多くの受講者を集める一方で、学内においても反転授業や予復習のために補助的に利用されるなど、その活用方法も多様化しつつあります。また、分析されたMOOCの受講生の学習データは、担当教員やスタッフにフィードバックされ、今後のMOOCや対面による授業の改善のために役立てられており、関連するワークショップ等と相まって、FDという観点からも重要な役割を果たしています。その意味では、10年以上に渡って継続的に取り組まれ、既に700以上の講義や教育コンテンツが蓄積・公開されているOCW（オープンコースウェア）も、互いの授業実践について相互的に学び合うための本学の貴重な教育的リソースであると言えます。さらに、教育コンテンツ活用推進委員会と高等教育研究開発推進センターによって新たに立ち上げられた、ICTを活用した教育の推進のためのポータルサイト「CONNECT」を通じて、本学の教育のさらなる進展や国際化を図るために、新たな技術や教育方法の効果的活用のためのアイデアや知見が活発に発信・共有されていくことも期待されています。

本報告書では、この他にも「新任教員教育セミナー」や「大学院生のための教育実践講座（プレFD）」をはじめ、全学や各部局の精力的なFDの取組や事例が紹介されていますので、是非お目通しいただくとともに、今後の勉強会・ワークショップや新たな活動企画についても幅広くご意見・ご提案いただければ幸いです。

最後となりましたが、今後とも本委員会の活動のさらなる充実を図ると共に、各部局で催されるFD研修会やワークショップ等の情報共有や「相互乗り入れ」なども、本報告書や本委員会の広報活動を通じて一層活発に行ってまいりますので、各部局の教職員の皆さまには、より一層のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

全学教育シンポジウム

「データと理想にもとづいて考える京大の教育改革 ー入試から大学院教育までー」

9月9日、桂キャンパス「船井哲良記念講堂」を会場とし、教職員等240名の参加を得て、全学教育シンポジウムを開催しました。

本学では、1996年以来、毎年、全学教育シンポジウムを開催し、教養・共通教育や大学評価など、様々な教育課題を取り上げてきました。20回目にあたる今回は、2016年度から本学独自の特色入試が実施され、データを重視する第3期中期目標・中期計画期間が始まったことを受け、「データと理想にもとづいて考える京大の教育改革ー入試から大学院教育までー」をテーマに掲げました。

午前の部では、北野正雄理事・副学長による「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」と題した基調講演の後、京都大学の大学院教育における先駆的・特色的な取組について、博士課程教育リーディングプログラムやダブルディグリー・プログラムなど、幾つかの研究科やプログラムから報告がありました。2015年度は、「10学部の特色ある教育」を取り上げましたので、その続編にあたります。



午後の部では、まず山極壽一総長から、「京都大学の教育体制を世界の大学のデータから展望する」というテーマで基調講演を行っていただきました。講演に引き続き、教学IR（教育についての組織的な調査分析）の基本的な考え方や方法について話題提供があり、さらに、本学においてデータにもとづいた教育改善にこれまで取り組んでいるいくつかの部局からの実践の成果や現状に関する報告がなされました。それを受けて、今後の本学における教学IRの可能性、課題や展望等について、パネルディスカッションを行いました。



プログラム [司会進行：田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授]**午前の部****10:00～** **開会挨拶・基調講演 1**：北野 正雄 理事・副学長 「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」**10:30～** **テーマ1**：「京大の大学院教育－何が課題か？－」
趣旨説明：松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授**10:35～** **報告**：
①博士課程教育リーディングプログラム
・石田 亨 情報学研究科教授 (デザイン学大学院連携プログラム)
②海外の大学院との連携 (ジョイントディグリー、ダブルディグリーなど)
・平田 昌司 文学研究科長
・石原 慶一 エネルギー科学研究科教授
③大学院教育の多様化と柔軟化・学際化
・北村 隆行 工学研究科長
・安里 和晃 文学研究科特定准教授 (アジア研究教育ユニット)
④大学院教育と社会の接続 (キャリア支援など)
・杉野目 道紀 工学研究科教授・理事補 (教育担当)**11:55～** **質疑・ディスカッション****12:30～** 昼食・休憩**午後の部****13:40～** **基調講演 2**：山極 壽一 総長 「京都大学の教育体制を世界の大学のデータから展望する」**14:00～** **テーマ2**：「データから京大の教育をとらえる」
趣旨説明：飯古 透 高等教育研究開発推進センター長・理事補 (教育担当)**14:05～** **報告**：
話題提供：
・山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授 「教学IRとは」
部局からの報告
・理学部：畑 浩之 理学研究科教授
・工学部：三ヶ田 均 工学研究科教授
・薬学部：加藤 博章 薬学研究科教授
・経済学部：北田 雅 経済学研究科講師
・教育学部：服部 憲児 教育学研究科准教授
・国際高等教育院：三輪 哲二 国際高等教育院副教育院長**15:35～** 休憩**15:50～** **パネルディスカッション「データから京大の教育をとらえる」**
モデレーター：飯古 透 高等教育研究開発推進センター長・理事補 (教育担当)
パネリスト：
・山極 壽一 総長
・北野 正雄 理事・副学長
・畑 浩之 理学研究科教授
・三ヶ田 均 工学研究科教授
・加藤 博章 薬学研究科教授
・北田 雅 経済学研究科講師
・服部 憲児 教育学研究科准教授
・三輪 哲二 国際高等教育院副教育院長**16:55～** **閉会挨拶****17:00** 終了**17:15～** 情報交換会 カフェ「Arte」

アンケート調査（有効回答数98件、回収率40.8%）の回答を見ると、参加者からは「課題に対して、各部署がどのような取り組みをしているか、知識を得ることができた。」「データをもとにある程度教育現場の現状をとらえるということが、大事だと非常に感じました。」といった感想が寄せられており、プログラム自体は概ね好ましく評価されていました。

小規模な勉強会・ワークショップに参加したいと思うテーマを問う質問（複数回答可）でも、中退者・成績不振者への対応（24.5%）、教育方法（アクティブラーニング、PBLなど）（23.5%）、教育情報の収集・分析・活用（IRなど）（22.4%）などが多く挙げられており、シンポジウムで扱ったテーマへの関心の高まりも感じられました。それぞれの参加者が教学IRや学部・大学院教育について深く考えるための機会となったと考えられます。

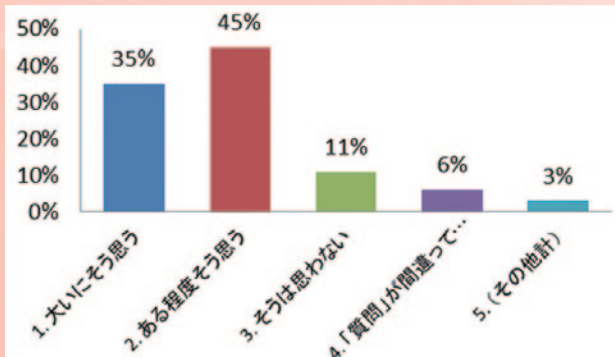
詳細は『第20回全学教育シンポジウム報告書』をご覧ください。



質問：

京大流教育の理想の追求・実現のためには、
(適切な)データの収集・活用が重要である

1. 大いにそう思う
2. ある程度そう思う
3. そうは思わない
4. 「質問」が間違っている



パネルディスカッションでのフリッカーを使ったQ&Aから

大規模オープンオンライン講義(MOOC)

(1) 京都大学における MOOC

本学では、MOOC (Massive Open Online Courses : 大規模オープンオンライン講義) プラットフォームの edX (<https://www.edx.org>) を通して、全世界に向けて英語による無償のオンライン講義を配信しています。OCWとは異なり、MOOCは大学の講義のように開講期間中に週ごとに講義コンテンツが公開され、出題された問題や試験に解答しながら、一定の基準を満たした受講者¹には修了証が発行される点が特徴で、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に大きな注目を集めています。edXは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が中心となり設立された、世界トップクラスの大学や教育機関で構成されるMOOCの大学コンソーシアムです。本学は、2013年に日本の大学としては初めてこの試みに参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています。

MOOCの制作、運用、分析・評価は高等教育研究開発推進センター(以下「センター」)が担当しており、2016年度には8講義が開講されました。KyotoUxのFacebook ページ (<https://www.facebook.com/kyotoux/>) にも、講義の配信予定などの最新情報が随時提供されていますので、是非ご覧ください。

注1: 受講者が修了証を得るためには有償(現在は\$49)のVerified Trackに登録する必要があります。

(2) MOOCの制作・運用について

MOOCの制作や開講期間中の運用については、センターの担当スタッフが、講義担当教員の目的や要望に合わせ、さまざまな支援を行っています(表1)。

【表1】MOOCの制作・運用の流れ

STEP 1 事前打ち合わせ	講義内容、配信期間、講義ビデオ制作、課題の出し方、TAを含む支援体制等について、担当教員の方針や要望を取り入れながら、制作する講義の全体像をつくっていきます。
STEP 2 講義紹介ページ配信	講義の魅力や概要を伝える紹介ビデオを制作・公開し、講義開始までに受講者を募集します。
STEP 3 講義コンテンツ制作	講義ビデオの撮影や課題制作等を行います。講義配信までにすべてのコンテンツを準備します。
STEP 4 講義配信	edX上に講義コンテンツを設置し、講義を配信します。講義開始から終了まで1週間ごとに講義コンテンツを追加します。
STEP 4 講義配信終了	講義終了後、Verified Trackのうち基準を満たした受講者に対して担当教員の署名入り修了証を発行します。



(3) 講義担当者へのデータ分析のフィードバック

KyotoUxでは、MOOCの講義に関わる様々なデータを収集し、受講者の学びや講義の活用に関する研究を行っています。

MOOCのプラットフォームであるedXからは、受講者のデモグラフィックデータに加えて、課題への取り組み、講義ビデオの視聴、掲示板の閲覧や投稿といった受講中の学習履歴が提供されます。KyotoUxのデータ分析スタッフは富士通株式会社と共同し、こうしたデータの分析・可視化を進めています。また、KyotoUxでは講義の提供を開始した週と最終週にオンライン調査を行い、受講者の受講動機や既有知識、講義の満足度などの把握にも努めています。これらのデータを用いて、学習者がMOOCの講義をどのように活用しているのか、どのような講義が受講者の学びに繋がるのかといった観点から分析・評価を進めています。

データの分析結果を可視化したものは、講義ごとに「コースレポート」としてまとめられています。開講期間のような基礎情報、受講者の人口統計学的な特徴、行動ログにもとづく集計、質問紙調査で得られた量的データの集計、自由記述の一覧などが主なコンテンツです。膨大なデータを集約しているために、コースレポートの分量も大きくなりがちですが、コースレポートのはじめのページにはデータ分析の結果を概括するサマリも作成し、内容を把握しやすいようになっています。



表紙



行動ログの例



質問紙調査の例

コースレポートの構成

コースの基礎情報	開講期間など
コースレポートのサマリ	コースレポートの内容を1ページに要約したもの。重要な数値は掲載しつつ、詳細なデータに参照できるように引用先のページ番号を明記してある。
人口統計学的特徴	性別、年齢、地理的信息など
行動ログに基づく集計	コンテンツのアクセス率、成績、掲示板の利用など
質問紙調査のデータ集計	Entrance survey や Ending survey などコース中で実施した量的データの集計
自由記述一覧	コースの改善の要望などを一覧にまとめたもの

001xにおけるコースレポートの例

作成されたコースレポートは、講義提供者、運営・制作チーム、分析・評価チームが一堂に会するフィードバックの場を設けて共有しています。フィードバックの場では、講義提供者に、講義の運用・作成の過程で障壁となった点や、好ましく感じたサポートなどを尋ね、その後の講義の運用・作成の改善に向けた情報交換が行われています。データ分析に関する部分では、コースレポートの内容を共有しながら、受講者の人口統計学的、心理的特徴についての予想と実際とのズレなどから、次回配信時の受講者獲得に向けたアプローチについての情報交換も行われています。また、コンテンツ活用の程度や成績の分布などを確認し、講義の難易度や課題の量の調整にむけた議論も行われています。

(4) フィードバックを受けての講義コンテンツの改善

コースレポートとしてまとめられた分析情報については、それ以降に公開する講義コンテンツを作成する際の参考にするなど、取得したあらゆるデータは講義コンテンツ開発にフィードバックしています。

2015年度に“Fun with Prime Numbers”を配信した伊藤哲史准教授は、2016年度に同講義をSelf-paced²として開講する際、コースレポートの内容を参考に、受講者がつまずきそうな箇所については、掲示板にあらかじめアドバイスやコメントを掲載しました。この試みは、受講者の理解を促進させるだけでなく、受講者同士のディスカッションを活性化させることにもつながっています。

また、2015年度に“Extremes of Life”を配信した跡見晴幸教授は、掲示板に投稿された受講者からの質問やコメントをすべて読み返し、質問が多かった箇所などについては、講義ビデオを撮影し直すなど、2016年度のSelf-pacedコースに反映させています。

このほか、公開が終わったコンテンツは、学内向け講義の補足教材や反転授業の教材として再び活用されるなど、様々な教育展開がなされています。

注2：講義コンテンツが毎週公開されていくのではなく、講義開始時点にすべてのコンテンツが公開され、一定期間（数ヶ月）の間に受講者が自分のペースで学習を進めるedXの開講形態



MOOC ワークショップ

10月17日、教育コンテンツ活用推進委員会主催による、MOOCに関するワークショップ「教育の最先端：MOOCって何?—その利用法と実践ノウハウまで—」が本学の教職員を対象に開催されました。実際にMOOCを世界に配信した教員や制作スタッフがMOOCに関する知見やノウハウを提供し、参加者の疑問に直接答える機会となりました。各部局からMOOCに関心のある約30名の教職員が参加しました。

プログラム

司会：田口 真奈（高等教育研究開発推進センター准教授）

【第1部】MOOC及びKyotoUxの説明

・酒井 博之（高等教育研究開発推進センター准教授）

【第2部】MOOCで講義を配信された先生の体験談と質疑応答

・伊藤 哲史（理学研究科准教授）

・児玉 聡（文学研究科准教授）

【第3部】全体ディスカッション

第1部では、MOOCの基本情報に加え、本学がこれまで配信してきた講義の紹介と、その制作から配信までのプロセス、データ分析・フィードバックについて、制作を担当する高等教育研究開発推進センターの教員より説明がありました。また、MOOCを反転授業などで活用した新たな取り組みについても紹介されました。続く第2部では、MOOCで講義を配信した2名の教員より、体験談が語られました。MOOCという新たな講義形式に対して教材を準備する際の苦労や工夫、多様な受講者からのフィードバックが得られることへの驚きなど、実際にMOOCを通して得られた経験が参加者と共有されました。最後の全体ディスカッションでは、課題の出し方や掲示板上でのやりとりについて複数の質問があった他、担当する教員へのインセンティブや、授業評価の方法などについても質問があり、活発な意見交換が行われました。



ワークショップの様子

教育コンテンツ活用推進委員会

2015年度より、これまでの情報環境機構オープンコースウェア運用委員会に代わって、高等教育研究開発推進センター内に、教育コンテンツ活用推進委員会が設立されました。全学組織である同委員会は、オープンコースウェアとMOOCの活用推進と運用及びサービスに係わる事項の協議・検討、連絡及び調整を行っています。2016年度は、3回の会議が催され、オープンコースウェア及びMOOCの利用や、京都大学におけるICTを活用した教育を推進するためのポータルサイト（CONNECT：p. 10-11 参照）の企画等について議論がなされました。

オープンコースウェア(OCW)

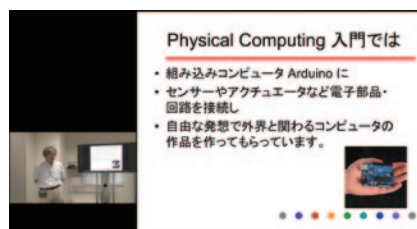
京都大学OCWから公開している講義コンテンツ

京都大学オープンコースウェア(OCW)で映像が視聴できる講義は716を数えます(2017年1月現在)。本学のOCWは、通常の講義以外にも、国際会議や公開講座、最終講義、オープンキャンパス等の多様な教育コンテンツを国内外の人々に向けて精力的に発信しています。現在公開されている講義コンテンツは、講義が321、公開講座が262、国際会議が65、最終講義が68あります。FDに直接関わる講義映像としては新任教員教育セミナーの映像が公開されています。また、本委員会のウェブサイトでは、授業をよりよくするために教員にとっても参考になるOCWの「おすすめ授業」が紹介されています。2016年度は11月3日に行われたアウン・サン・スー・チー氏による名誉博士称号贈呈式でのスピーチをはじめ、英語や仏語の映像も多数公開されており、国際的にも広く発信していることが特徴となっています(図1)。

京都大学オープンコースウェア : <http://ocw.kyoto-u.ac.jp> ▶



ミャンマー連邦共和国アウン・サン・スー・チー国家最高顧問「名誉博士称号贈呈式」および「学生との対話」



全学共通科目 ILAS セミナー : Physical Computing 入門



新任教員教育セミナー



第6回京大おもろトーク: アートな京大を目指して「矛盾をはらんだ創造」



【図1】2016年度に公開されたOCWの例(各QRコードから映像のページへアクセスできます)

京都大学オープンコースウェア(OCW)について

京都大学OCWは、学内で実際に利用している講義教材をインターネットで公開するプロジェクトで、2005年より国内外に向けて講義コンテンツを発信してきました。本学の学生や教職員、他大学の学生、関連学協会の研究者、本学への入学を目指す高校生、スキルアップのためにさらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に門戸を広げ、本学が行っている「教育」を多くの人に知ってもらうことを目的としています。また教育情報の公開を目的として、全部局のシラバスにOCWからアクセスできるようになっています。これまで蓄積されてきた700以上の教育コンテンツをどのように学内の授業等で活用していくか、高等教育研究開発推進センターに設置された教育コンテンツ活用推進委員会において議論・検討されています。今後も、世界へ向けて本学のビジビリティを高め、また日本の文化・伝統を発信するために積極的にアピールしていきます。OCWは、人類の知的資産への貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。

OCWのコンテンツ制作は、教授1名、研究員2名と学生スタッフで、講義収録、編集、推進を行っています。みなさまもOCWを通じて講義コンテンツを公開してみたいはいかがでしょうか。

京都大学におけるICTを活用した 教育を推進するためのポータルサイト (CONNECT)

本学の全学組織である教育コンテンツ活用推進委員会 (p. 8 参照) が置かれている高等教育研究開発推進センターでは、2016年度、京都大学におけるICTを活用した教育を推進するためのポータルサイト (CONNECT: CONtents for Next Education and Communication with Technology) を構築しました (図1)。

同サイトは、本学のICTを利用した教育コンテンツ (MOOC、OCW、講義ビデオ、教材等) を制作・活用するための情報を提供しており、日英2言語に対応しています。

CONNECT : <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/> ▶



【図1】CONNECT トップ・ページのイメージ

(1) CONNECT の特徴と概要

本学では、これまでMOOCやOCW、PandAといったICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームが全学として整備されてきました。しかし、本学の教職員がそれらを制作・活用する際に必要となる情報を一つにまとめたウェブサイトはありませんでした。CONNECTはこれらの情報を一つのウェブサイトにとまとめ、目的別に適切なサイトへと誘導するポータルサイトです。本サイトは日英両言語に対応しています。

具体的なコンテンツとしては、本学が保有する各種コンテンツやプラットフォームの概要をまとめた「Projects」、本学におけるICTの教育での活用事例を紹介する「Topics」、MOOCやOCWの制作方法をステップに分けて整理した「How To」、本サイトで紹介している各種のコンテンツや教育コンテンツ活用推進委員会、ICT活用教育全般に関する質問をまとめた「よくある質問 (FAQ)」、そして、「お問い合わせフォーム」があります。

(2) Projects

「Projects」のページ (図2) では、現在、MOOCやOCW、本学が運用する学習支援システム (LMS: Learning Management System) である PandA、オンラインFD支援システム: MOSTについて紹介しています。各ページは、概要紹介、最新・おすすめコンテンツ紹介、各種リンク等で構成され、各「Project」のポータルページに相当します。



【図2】「Projects」トップ・ページ

(3) Topics

「Topics」のページでは、本学がこれまでに制作・構築してきたMOOCやOCW、PandAのみならず、様々なICTを活用している教員の事例をインタビュー形式で紹介しています。

現在利用しているICTをなぜ授業に導入したのかという点にはじまり、授業設計にかける思いや運用上の苦勞、教育効果といった点が、率直に語られており、これから各種ICTを利用しようとする教職員にとって参考となる情報が多く含まれています。記事は随時追加される予定です。面白い授業実践をされている先生の情報もお待ちしています。



【図3】「Topics」内各記事のイメージ

(4) How To

「How To」のページ（図4）ではMOOC、OCWを制作する手順をステップに分けて紹介している他、それぞれの問い合わせ先や申し込みフォーム、FAQへの内部・外部リンクを置くことで、関心をもった教職員が制作時に必要となる情報を網羅的に扱っています。今後、「Project」が増えるに伴って、「How To」の項目も増えていく予定です。

(5)「よくある質問 (FAQ)」

「よくある質問」では、本学の教職員より寄せられたICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを制作・活用する上での疑問に対して、各項目別に回答しています。それぞれの回答には適切な内部・外部ページへのリンクが貼ってあり、それらを辿ることで、より詳しい情報を得ることができます。

(6)「お問い合わせフォーム」

本ページの内容やMOOC、OCWへのご質問やご意見、学内の教育コンテンツ活用に関する情報をお寄せいただくための「お問い合わせフォーム」を設けています。



【図4】「How To」イメージ
(イメージはMOOCの制作手順)

プレFDの取り組み

大学院生のための教育実践講座

本講座は、FD研究検討委員会が主催し、将来、大学教育に携わることが希望する本学の大学院生（PD・研修員などを含む）のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で12回目となります。2016年度は、8月23日に百周年時計台記念館2階で開催され、参加者は35名でした。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラムに対する満足度を5件法（1: まったく満足していない～5: 非常に満足している）で評価したところ、全体平均4.23点（グループ討論4.16点、ミニ講義4.10点、コミュニケーションデザイン4.39点）となりました（回答数31）。この取り組みに対する高い満足度がうかがえます。

大学院生のための教育実践講座 ▶ <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

プログラム

- 10:00～ **開会式** 挨拶：飯吉 透 教授（FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長・理事補）
趣旨とプログラムの説明：奥本 素子 高等教育研究開発推進センター特定准教授
- 10:20～ **セッション1** ミニ講義1「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授
- 10:45～ **セッション2** グループ討論1「大学の授業をどう思うか」（自己紹介）
- 11:45～ **セッション3** ランチと自由討論
- 13:00～ **セッション4** コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」
：蓮 行 劇団衛星代表／京都外国語大学非常勤講師
- 14:20～ **セッション5** ミニ講義2「大学で教師になるということ：新任教員の挑戦!」：佐金 武 大阪市立大学講師
- 15:05～ **セッション6** グループ討論2「大学の授業で教師に求められるもの」
- 16:05～ **グループ討論整理**
- 16:40～ **セッション7** 全体討論「大学で教えるために」
- 17:40～ **ラップアップ**
- 17:40～ **閉会式** 挨拶：北野 正雄 京都大学理事・副学長
修了証授与：飯吉 透 教授
閉会式終了後 情報交換会（18時30分まで）



研究科横断型教育プログラム ―大学で教えるということ―

本学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム（研究科横断型教育プログラム）を2009年度から実施しています（詳細は、ウェブサイトにて<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/cross/2016>）。

その中の「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」（後期集中講義）を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- ① 大学教育の現状を知り、理解すること
- ② 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- ③ 効果的な授業デザイン（到達目標・評価方法）を作成すること
- ④ 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- ⑤ 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- ⑥ グループでの協同作業に積極的に関わること
- ⑦ 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2016年度は2月8日から10日まで3日間実施されました。受講生は9名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました（教育学研究科5名、人間・環境学研究科2名、文学研究科1名、経済学研究科1名）。専門分野の異なるチーム（3名×3チーム）で授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート（9名中8名から回答）では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた（平均4.0）」、「講義中に学生の質問・発言等を促してくれた（4.0）」、「自分の将来に役立つ



内容だった（3.9）」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった（3.9）」（いずれも4段階評定）など高い評価が得られました。自由記述からは、「異分野の人と深く議論ができたのは大変有意義だった」、「大学教育について考える際の視野が広がった」、「一方向な学びではない、双方向の学びは非常に刺激になりました」、「習ったこと、感じたことをそのまま授業準備に使える」、「もう少しゆっくりと人に教えるということ（コーチング）を学べる科目がほしい」、「この作った授業を実際にやる機会が欲しい」といった様々な声が聞かれました。

新任教員教育セミナー

高等教育研究開発推進センターでは、2010年度より教育推進・学生支援部教務企画課の支援のもと、本学に新たに採用された新任教員を対象とした新任教員教育セミナーを実施しています。2016年度はその7回目にあたります。「京都大学らしい教育とはどのような教育か」を考え、「学内にはどのような教育サポートリソースがあるのか」「大学・部局や教員はどのような教育課題を抱え、それにどのように取り組んでいるのか」を知ってもらうための機会となっています。

本セミナーは、前期の教育経験をふまえてそのふり返りの機会となることもめざして、例年、9月に実施しています。2016年度は、9月1日に百周年時計台記念館国際交流ホールにて行いました。プログラムは、表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

【表1】2016年度 京都大学新任教員教育セミナープログラム

12:45～	受付
13:00～	開会式 (司会：高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史) 趣旨説明：高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー：「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長（教育・情報・評価担当） 北野 正雄
13:25～	セッション2 ミニ講義：「京大の教育的取組：ICTを活用した教育の展開」 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透
13:45～	セッション3 本学教員による教育実践紹介 私の授業①（文系）人間・環境学研究科共生人間学専攻思想文化論講座教授 安部 浩 私の授業②（理系）農学研究科応用生物科学専攻長・教授 松浦 健二
14:25～	「京大の教育・学習支援」 高等教育研究開発推進センター研究員 斎藤 有吾
14:30～	休憩
14:50～	セッション4 グループ別セッション（参加型セッション）
16:40～	休憩
17:00～	インテグレーションセッション
17:30～	閉会式 挨拶 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透

セッション1では、オープニングレクチャーとして、北野正雄教育担当理事より、「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題した講義を行っていただきました。セッション2では、京大の教育的取組として、飯吉透高等教育研究開発推進センター長より、ICTを活用した教育の展開について報告がありました。セッション3では、本学教員による教育実践紹介（「私の授業」）として、人間・環境学研究科の安部浩教授、農学研究科の松浦健二教授のお二人の先生に自身の授業実践について紹介していただきました。セッション4は、グループ別セッションで、2016年度からより参加型のセッションへとシフトしています。2016年度は、表2のようなテーマを掲げ、学内の先生方にもご協力いただきながら、5つのグループ別セッションが行われました。最後のセッションでは、初めての試みとして、異なるグループ別セッションに参加した先生同士がグループになるよう設定し、他のグループでの内容を共有し合うジグソー法を用いたインテグレーションセッションを実施しました。

【表2】セッション4 グループ別セッションの各テーマと内容

【テーマ】	【英語による授業】を担当することになったら (参加者 26 名)
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター長・教授 飯吉 透／総合生存学館准教授 Marc-Henri DEROCHE
【主な内容】	英語による授業を急に担当することになったとしたら困惑する教員も多いのではないだろうか。ここでは、そのような事態になった場合に、どのように考え、何から準備すればよいのかについて考える。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定研究員 鈴木 健雄
【テーマ】	【研究室をどう運営するか】 (参加者 35 名)
【担当講師】	学際融合教育研究推進センター准教授 宮野 公樹
【主な内容】	教員にとっての研究推進の場、そして高度な人材育成の場である研究室。研究室を、研究と教育の原動力として機能させるには？
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定准教授 奥本 素子
【テーマ】	【困難を抱えた学生に向き合うには】 (参加者 21 名)
【担当講師】	学生総合支援センター長・教授 杉原 保史
【主な内容】	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのだろうか。また、対応が必要なのはどのような場合なのか。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代
【テーマ】	【講義科目でおこなうアクティブラーニング型授業】 (参加者 18 名)
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター教授 溝上 慎一
【主な内容】	50～150人規模の講義科目でどのように学生に授業に参加させるか、アクティブラーニング (講義で聴くだけでなく、書く、話す、発表するなどのアウトプットの学習活動を入れるか) を、理論的、実践事例を交えてセミナーをおこないます。後期からすぐ導入できるやり方、少しアドバンスですが、クリッカーを用いたピアインストラクションの技法をお伝えします。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、少しやったことあるが、この機会にしっかり学びたいという方まで参加可能です。ご参加をお待ちしています。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定研究員 福田 宗太郎
【テーマ】	【ICT活用による教育-反転授業を中心に-】 (参加者 4 名)
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター准教授 酒井 博之／田口 真奈
【主な内容】	インターネット上の教育リソースや、既存のICTツールを授業に取り入れることで、授業時間を効果的に使い、教育効果をあげることができます。講義内容を授業外に映像等で学び、教室内では応用的な課題に取り組む「反転授業」という授業形態もその一つです。ここでは、実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定助教 岡本 雅子

本セミナーは、教育目的に限定して設計されているため、受講対象となる新任教員を、「平成27年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部局に対して参加者依頼通知を行いました。当日の参加者は105名 (内訳: 教授12、准教授29、講師15、助教49) でした。

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行いました。その結果、91名から回答が得られました。

プログラム全体の有意義度は、5段階で4.1 (有意義と回答した割合は85%) と高い値が得られました。個々のセッションでみると、グループ別セッションが最も高く (4.5)、次いで私の授業 (4.3)、そして2016年度から導入したインテグレーションセッション (4.2) となっていました。自由記述でも様々な意見・感想をいただきました。良かった点として、他分野の先生方と話せたりつながりができたことを良かったと感じておられる先生が多かったです。教育に対して自信がついたり、意欲が上がったといった声も聞かせていただきました。改善点としては、インテグレーションセッションの時間が少なくもっと欲しかったといった声が多かったです。他にも、時間配分 (厳守)、休憩時間を増やす、各セッションの目的の明確化、参加型 (議論) の時間を増やすといった点があげられました。グループ別セッションで希望するテーマについても、留学生対応やワークライフバランス、アウトリーチ活動など多様なニーズが寄せられました。

こうした意見を参考に、今後もよりよいプログラムになるよう改善していきたいと思います。



教育制度改革に関する勉強会・研修会

「3つのポリシー」勉強会と「自己点検・評価」研修会

京都大学では現在、全学の教育制度委員会の下で、GPAや科目ナンバリング制度の導入、カリキュラムの体系化、3ポリシーの策定などの教育制度改革が進んでいます。FD研究検討委員会はこれまで、高等教育研究開発推進センターや教育推進・学生支援部教務企画課との連携をとりながら、そうした改革についての勉強会を開催してきました。

2016年度は、9月に、3ポリシーの策定のための勉強会を行いました。

また、2016年度から、第三期中期目標期間に入り、3つのポリシーに基づく学修成果と内部質保証が求められるようになったことから、11月には、高等教育研究開発推進センター・教育アセスメント室と企画・情報部企画課IR推進室の連携のもと、自己点検・評価の研修会が開催されました。

「3つのポリシー」勉強会 —3ポリシーの策定の支援—

9月28日の午前・午後の2回に分けて、「3つのポリシー」勉強会を開催しました。3つのポリシーとは、ディプロマ・ポリシー（卒業の認定に関する方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）、アドミッション・ポリシー（入学者の受入れに関する方針）のことです。学校教育法施行規則改正（2016年3月31日改正、2017年4月1日施行）でこの3ポリシーの策定・公表が義務化され、既に公表済みのものについても、内容の見直しが求められることとなりました。

今回の勉強会は、各部局での3ポリシーの策定を支援することを目的としたものです。参加者の多くは各部局の3ポリシー策定担当で、参加者数は午前の部が24名（9部局22名、入試企画課2名）、午後の部が21名（9部局）、計45名（教員23名、職員22名）でした。

勉強会では、第1部で、策定上の留意点について高等教育研究開発推進センターから説明がなされた後、意見交換があり、第2部で、ワークショップ形式の相談会が行われました。また、勉強会以外に、要望のあった6部局に対しては、作業の進捗に応じて、高等教育研究開発推進センターによるコンサルテーションも行われました。

```
graph TD; A[教育担当理事－教育制度委員会] <--> B[各部局]; C[勉強会・コンサルテーション] --> B;
```

教育担当理事－教育制度委員会

各部局

勉強会・コンサルテーション

3ポリシーの策定にあたって主な論点になったのは以下のような点でした。

- ①策定単位をどうするか（例えば、学位は学部で一つだが、カリキュラムや入試は学科によって異なる場合、3ポリシーを学部、学科のどちらで策定するか）
- ②ディプロマ・ポリシーで、学修成果の目標となる資質・能力をどう表現するか
- ③カリキュラム・ポリシーに記述することになっている、プログラム単位や科目単位の学修成果の評価をどう行うか
- ④アドミッション・ポリシーと実際の入試方法（一般入試と特色入試）をどう対応させるか

勉強会では、既に見直しがほぼ完了していた理学部・理学研究科の3ポリシー案を参考事例として紹介しながら、見直しのポイントや書き方のフォーマット例などが示されました。以上の勉強会の資料は、下記のウェブサイトに掲載されています。

第14回勉強会「3つのポリシー」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/session/>

各部局から提出された3ポリシーは、教育制度委員会、入学試験委員会で検討され、2016年度中に公開されることになっています。



「自己点検・評価」研修会 ―3ポリシーに基づく評価の支援―

3ポリシーの策定の次に求められるのは、3ポリシーに基づく学修成果の評価と内部質保証の作業と予想されます。第三期中期目標期間中に予定されている機関別認証評価及び法人評価の教育・研究評価をにらんで、それに向けての評価作業の研修会を、11月24日に、部局の評価関係者を対象に行いました。

研修会は、教育・情報・評価担当理事主催「自己点検・評価に係る研修会」と題して2部構成で実施されました（第1部は学部・研究科対象、第2部は研究所・センター対象）。

学部・研究科の教職員を主な対象とした第1部（参加者数 教員25名、職員30名）においては、「3ポリシーを踏まえた評価指標の開発と評価書類への記載のしかた」について、「現況調査表（教育）」の作成のポイントを説明しました。そのポイントは、大きくまとめると、次の2点となります。

- ・現況調査票の「I.教育目標・特徴」に3つのポリシーの「ディプロマ・ポリシー」を書くこと
- ・ディプロマ・ポリシーとしての教育目標に合わせて、「II.分析項目 I.教育活動の状況」「II.分析項目 II.教育成果の状況」をエビデンス（数値、図表）を示して説明すること

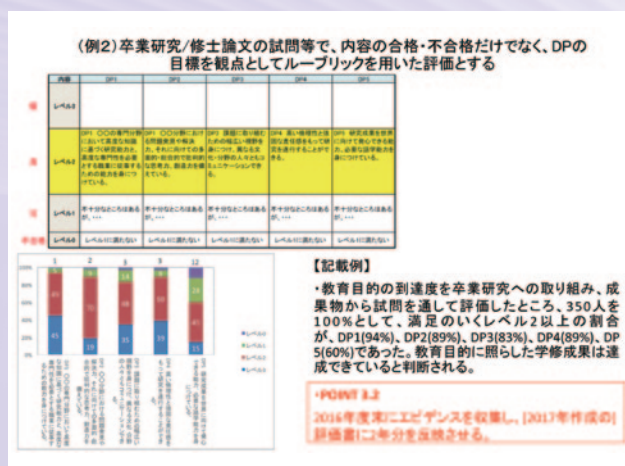
今回の作業でもっとも大きな課題だと考えられたのは、ディプロマ・ポリシーに対応する学修成果について内部質保証が得られているか、それに向けてのPDCAサイクルが確立しているかにあります。説明のなかでも、ディプロマ・ポリシーのアセスメント指標作り・エビデンス化について、高等教育研究開発推進センター教育アセスメント室から数例の考え方の提案がありました（図を参照）。



現況調査票の構成

- I ○○学部（研究科）の教育目的と特徴 …… 1-2
- II 「教育の水準」の分析・判定 …… 1-3
 - 分析項目 I 教育活動の状況 …… 1-3 ……
 - 分析項目 II 教育成果の状況 …… 1-0 ……
- III 「質の向上度」の分析 …… 1-0

現況調査票の構成



エビデンス化の一例

各部署の取り組みの紹介

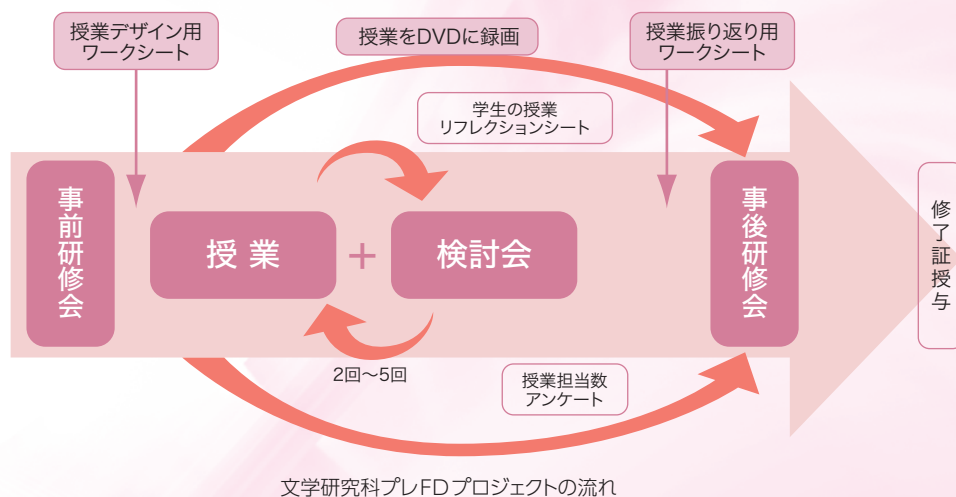
文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールです。2009年度から実施されており、すでに約120名が修了証を得ています。2016年度は、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系から20名が参加しています。

本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2～5回の公開授業、他の講師及びコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与されます。このプロジェクトの構造は、2011年に事前研修会が加わって以降、まったく変わっていませんが、それを支える文学研究科のコーディネーターの先生(2016年度は4名)、教務補佐員(2016年度は3名)、センタースタッフ(2016年度は4名)は入れ替わりながら、プロジェクトが継続されています。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程や各授業の題目などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

文学研究科プレFDプロジェクト ▶ <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



2016年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

児玉 聡／文学研究科准教授(統括コーディネーター)
上原 麻有子／文学研究科教授(哲学基礎文化学系コーディネーター)
田中 和子／文学研究科教授(行動・環境文化学系コーディネーター)
杉本 淑彦／文学研究科教授(基礎現代文化学系コーディネーター)
飯塚 一／教務補佐員(哲学基礎文化学系)
植田 尚樹／教務補佐員(行動・環境文化学系)
中山 俊／教務補佐員(基礎現代文化学系)
飯吉 透／FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長
松下 佳代／高等教育研究開発推進センター教授
田口 真奈／高等教育研究開発推進センター准教授
福田 宗太郎／高等教育研究開発推進センター特定研究員



授業風景および授業後の検討会の様子

2016年度のプレFDを振り返って

統括コーディネーターから

諸事情で2016年度の総括コーディネーターを務めることになりましたが、各系のコーディネーターの先生方や優秀な教務補佐員の方々、そして高等教育研究開発推進センターの手厚いサポートのおかげで、2016年度のプレFDも順調に終わることができました。関係各位には記して謝意を表する次第です。また、2015年度から始まった「人文学入門」については、2016年度は行動・環境文化学系及び基礎現代文化学系の7人の講師により、「常識を手放す旅—アジアから現代日本が見えてくる」という副題を付け、後期に京都駅前のキャンパスプラザ京都にて実施しました。本学の学生だけでなく他大学のさまざまな学生が集まった教室で教えることは、プレFDを修了した者にとっても新鮮な体験であり、また大きな挑戦となったと思われます。講師たちの熱心で親身な教育姿勢も手伝い、最後まで多くの受講生が残り、学生同士で活発な議論が繰り広げられました。この経験は、どのような大学・学部就職しても対応可能な教育スキルを付けるのに資するでしょう。本講義は、次年度も内容を変えて継続予定です。

(文学研究科准教授 児玉聡)



各系のコーディネーターから

・哲学基礎文化学系

講師の皆様、それぞれの目的で系ゼミに臨んだことと推察しますが、とても真剣に取り組んでいるのに、驚きました。経験が少ないゆえに、大学の講師としての未熟さがあって当然です。しかし、有能な教務補佐員の飯塚氏から届く授業報告を読みながら、「これは、鍛えられているな」と、私自身も刺激を受けていた次第です。我々哲学の教員も、毎回の授業を、受講生や同僚からあれほど細かくチェックされるという経験など、まずしていません。たとえ3～4回の授業でも、皆様、十分に修行されたと思います。最終回のコンセプト・マップ作りは、大いに楽しめました。これは、形式的なまとめなどではありません。もともと関連づけない複数のテーマの授業からキーコンセプトを取り出し、コンステレーションを創出するものです。受講生にとっては、1セメスターで蓄積した知識の復習でありながら、実はそれ以上に、新たな思索の切り口を探り出す、優れた思考訓練なのです。今後は、コンセプト・マップ作りにより重点をおき、もう少し時間をかけた練習の場にできないものかと考えています。

(文学研究科教授 上原麻有子)



・行動・環境文化学系

2016年度の行動・環境文化学系の前期の入門ゼミナールでは、6人の講師により合計12回のプレFD授業が行われました。どの講師の方も、最初の授業の反省を次の授業に活かして工夫されていたし、講師と受講生たちとの間での対話や受講生同士の間での議論を積極的に取り入れている様子うかがえました。この対話形式の授業場面が増えたことが、4年前にコーディネーターを担当したときに参観した授業との大きな違いでした。難しい問いかけであっても、受講生の反応が良いのにも感心し、授業する側も、受講する側も、短い期間にずいぶん進化していると思いました。

授業後の検討会では、プレFD担当の教務補佐員の方が司会兼まとめ役として、出席者同士の意見交換だけでなく、互いの授業の改善について、活発な提案を促してくださったことで、熱気あふれる検討会になっていたことも印象的でした。自身で授業を経験する前と後で、他人の授業を見るポイントが変わることも興味深く感じました。

(文学研究科教授 田中和子)



・基礎現代文化学系

プレFDプログラムのコーディネーターを初めて務めさせていただきました。2016年度の講師5名もプレFDに初参加であり、その多くは大学の教壇に立つのも初めてでしたが、全員が、日々の研究の成果を存分に発揮していました。授業は、スライドや板書を駆使しつつ趣向を凝らしたものがほとんどで、その質の高さに驚きました。実際、受講生のリフレクションシートには、授業内容を十分に理解した上での質問や、面白く興味を持ったという感想が、多数見受けられました。

授業後の検討会も、教室での熱をそのまま移したような侃々諤々の議論ばかりでした。参観者及び担当講師は、いかに学生の関心を引き出しつつわかりやすく伝えるかという難しい問題について真剣に考えていました。そのため、検討会で指摘された欠点は、次の授業で改善されていたように思います。

講師5名が、今後も初心を忘れず、そしてプレFDで得た知見を活かし、研究成果を教壇の場で学生たちにいかに伝えるのか、その課題をつねに熟考しつづけるだろうことを確信しています。

(文学研究科教授 杉本淑彦)



大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

2015年度より、文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、文学研究科が提供する単位互換リレー講義「人文学入門」が開講されました。本授業は、本学文学研究科が初めて大学コンソーシアム京都に提供する単位互換授業で、京都駅近くのキャンパスプラザ京都にて実施されています。受講生は、本学の学生を含め、さまざまな大学から集まっています。

本授業は、特色ある科目として、大学コンソーシアム京都により「プラザ推奨科目」に認定されています。2015年度の実施科目「人文学入門：現代社会の諸問題に立ち向かうための哲学」の受講生は、『「哲学」と聞くと難しそうなイメージがしていたのですが、自分だけで考えて答えを出すというものよりも、受講者のみんなで考えるワークなどを通して、さまざまな人の意見や考え方を聞けるのでとても刺激的な授業』であったとインタビューに答えています。



http://www.consortium.or.jp/special/tani_gokan/interview/ より (2017年1月16日アクセス)

2016年度は「常識を手放す旅ーアジアから現代日本が見えてくる」を全体テーマとして、コーディネーター1名と講師7名が日本を含むアジア全体の近・現代的問題について言語学・歴史学・社会学・地理学といった様々なアプローチから授業を展開しました。

本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の1年前からスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討しあいます。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた新たな授業形式にも積極的に挑戦する本授業は、受講生から多くの肯定的評価を得ています。

2015年度の受講生に授業に対する満足度を5件法(1:まったく満足していない～5:非常に満足している)で評価したところ、全体平均4.73点となり、プレFD修了生たちの授業が魅力的なものとなっていることがうかがえます。

文学部単位互換リレー講義「人文学入門」▶ <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

2016年度のプログラム

コース・コーディネーター	児玉 聡／京都大学大学院文学研究科准教授
文化と言語	植田 尚樹／大阪樟蔭女子大学非常勤講師
『国語』と『国民』	川崎 陽／佛教大学非常勤講師
中国の学校教育	柴田 陽一／関西学院大学非常勤講師
タイの宗教と社会	福浦 一男／滋賀医科大学非常勤講師
ドッケビを通して見る韓国視覚文化	パク ミギョン／京都大学非常勤講師
認知症と社会	翁 和美／大谷大学文学部社会学科助教
現代日本についての考えをまとめる	松谷 実のり／京都大学非常勤講師



課題作業やディスカッションを取り入れた授業の様子

教育学部・教育学研究科の取り組み 一部局支援・協働型FDによる組織的な教育の質保証・質向上

FDは、個々の授業改善や単発の研修に参加するにとどまりません。日常的に行われる授業やカリキュラムの実態に即して、組織的な観点から教育の質を保証・向上させる必要があります。そのための試みとして、2016年度は教育学部・教育学研究科の取り組みを支援するとともに、協働による様々な取り組みを行いました。具体的には、初年次教育（専門必修科目）の設計と評価に関する取り組み（中身）、特色入試の効果検証に関する取り組み（入口）、3つのポリシーの評価に関する取り組み（出口）の支援・協働に着手しました。

（1）「教育研究入門」の取り組み（教育学研究科准教授 服部 憲児）

教育学部においては、特色入試の実施に合わせて、「教育研究入門」のリニューアルを行うこととし、そのためのワーキング・グループを立ち上げました。高等教育研究開発推進センター（以下、センター）教員にもオブザーバーとして参加いただきました。そこで、高校教育・大学入試・大学教育の接続・一貫性を図り、主体的な学びを涵養することを目指し、とりわけ「教育研究入門I」（前期配当）は、これまでリレー講義形式で行われてきたものを、



探究型の授業として全面的に内容・方法を刷新することとしました（写真は授業の最後に行ったポスター発表会）。

今回のリニューアルにおいては、①教員等の教育能力・意識の向上、②様々な資源の連結と有効活用、③エビデンスに基づく検証（アセスメント）と改善を考慮に入れて設計を行いました。①については、複数教員（従来通り専門分野の異なる3名の教員で担当）によるチーム・ティーチングとし、授業運営の議論や教授法の相互参照により教育力の向上を図りました。さらに教員の指導の下でTAにも教育・指導に実質的にかかわってもらい、ブレFD的要素も組み込みました。②については、特色入試問題の利用やオープンキャンパスなどでの探究活動の成果の活用などを企画しました。③については、授業を実施しながらのデータ収集は困難であると判断し、専門性を有しているセンターの教育アセスメント室に協力を依頼しました。詳細については、9月9日の全学教育シンポジウムにおいて発表しましたので、その報告書を合わせてご参照ください。

上記のうち、アセスメントからは期待通りに教育改善に資することができる多くの有意義なデータを得ることができました。分析結果から、授業の目的が概ね達成できたことを確認するとともに、いくつかの課題も明らかになりました。これらを次年度以降の改善に活かしていくことが、今後の重要な作業となります。また、これらを広く教育学研究科教員に知ってもらうためFD（後述の教育学研究科セミナー）でも取り上げ、部局構成員の2/3近くの教員の参加を得ました。日常に即したテーマを取り上げたことで、成果や課題の共有、意識の向上の点できわめて有意義であったように思います。なお、この成果の一旦について、以下のフォーラムで発表を行いました。

服部憲児・山田剛史

高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践（1）
第23回大学教育研究フォーラム（2017年3月20日；京都大学）

山田剛史・服部憲児

高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践（2）
第23回大学教育研究フォーラム（2017年3月20日；京都大学）

(2) 特色入試追跡調査WGの取り組み(高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史)

2016年度より導入された特色入試の効果検証を行うため、教育学部では特色入試追跡調査WGが設置されました。上記1で紹介された教育研究入門のアセスメントとの連動という点から、筆者もメンバーとして参画し、5月10日に特色入試合格者5名に対するグループインタビューを行いました(写真)。その結果は、京都大学特色入試のページにも掲載されています(<http://www.nyusi.gakusei.kyoto-u.ac.jp/tokushoku/03educ/>)。



入試改革の効果を、入学後の学習とも関連づけながら、質的・量的にデータを収集・分析し、次の改善に活かすという流れを構築することができました。また、その成果は論文にまとめ、刊行されました。当該論文は、高等教育研究開発推進センターのサイトにも掲載されています(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/kiyou/>)。

楠見孝・南部広孝・西岡加名恵・山田剛史・斎藤有吾(2016)

「パフォーマンス評価を活かした高大接続のための入試—京都大学教育学部における特色入試の取り組み—」
『京都大学高等教育研究』第22号、55-66.

(3) 自己点検・評価委員会の取り組み(高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史)

上記1の授業改善とその効果検証、2の入試改革とその効果検証の一部について、部局の教員間で共有するための場が設けられました。自己点検・評価委員会主催の「教育学研究科セミナー」が新たに設置され、その第1回目(10月27日)として以下のような内容で服部先生と筆者が報告を行い、教員間で議論を行いました。また、2017年3月9日に行われた第4回の同セミナーでは、特色入試をテーマに取り上げ、前述した特色入試追跡調査WGが行った調査・研究や筆者が行ったアセスメントの結果が報告されました。

第1回 教育学研究科セミナー

服部 憲児: <<探究型>>教育研究入門Iの船出

山田 剛史: 教育学部2016年度入学生へのアセスメント結果の報告—新たな高大接続への挑戦をデータから捉える

第4回 教育学研究科セミナー

楠見 孝 : 高大接続のための多面的評価: 高校生へのメッセージとしての特色入試

山田 剛史: 教育学部2016年度入学生へのアセスメント結果の報告(第2弾): 特色入試がもたらす意義と可能性

また、同委員会が主導で、学士課程卒業時及び大学院課程修了時のアセスメント(卒業時・修了時調査)を設計し、2016年度より実施する運びとなりました。当該調査の検討には、センターアセスメント室も加わり、3つのポリシー(特にDP及びCP)の検証が可能なように設計しました。認証評価への対応も含め必要なエビデンスの収集を行う仕組みが整備されました。

2016年度は、入口(入試改革)、中身(授業・カリキュラム改善)、出口(卒業時・修了時の評価)の3点で一貫性も担保されたアセスメントが設計・導入されました。課題はありますが、部局とセンターの協働により、入試・教育・評価の一体的な改革推進の仕組みが整備されました。学内においてこうした事例を増やしていくことが大切だと考えています。

医学研究科におけるFD

医学研究科 附属医学教育推進センター長 小西 靖彦

医学部では、1996年から医学教授会の全教授が年末の1日を費やしてFDを行っており、カリキュラムについて学んだり、他大学の状況を聴講したりしていました。私が医学教育推進センターに着任した翌年（2012年）の教授会FDで、全教授が小グループの円テーブルに着いて「医学部の卒業生はこうあってほしい」像を考え、何百枚もの付箋紙を貼りながら議論を行いました。その後数ヶ月をかけて集約した卒業時アウトカムは次のようなものになりました（ここでは表題のみを示しています）。

京都大学医学部卒業生のアウトカム

- 独創的発想と挑戦
- グローバルな活躍
- 豊かな知識と技能
- 生涯学習
- 医師としての使命感
- 患者の視点
- 多職種での協働
- コミュニケーション

教員自身の手でアウトカムを策定してみると、対応した学習方略が果たして採られているかがあぶり出されます。「使命感はどうやって身につけるのか?」「コミュニケーションは誰がいつ教えているのだろうか?」「研究者育成のプログラムは十分か?」ここにFDのニーズが顕在化してきたため、最近の教授会FDや臨床実習担当教員との会合では、講義を聞くのではなく上記の問いについて学生を交えて考える会に変化しつつあります。

学習者評価においては、診療の場における実習生の態度面について大きな議論が起きました。医学教育推進センターが中心となり「アンプロフェッショナルな学生の評価」を導入するにあたり、臨床実習先の診療科教授及び実務担当教員の2つの層でセンター教員との継続的な話し合いが行われました。この診療科別の地道な話し合いこそが臨床実習教育の改善活動であり、個別（ミニ）FDと呼んでいます。

医学部後半2年（臨床実習）と卒後2年（臨床研修）の指導医FDは、京大病院と協同で「指導医のためのワークショップ（1回あたり約40名：1泊2日）」を毎年2回続けています。ここでは現場の医師に対して教育法、評価、カリキュラム開発などについての学習機会を持っています。

2～4回生（臨床実習前）において、講義などを担当する教員のFDを厚くすることが今後の課題と捉えています。

FD研究検討委員会概要

FD研究検討委員会は、本学の教育担当理事、各部局から選出された教員、高等教育研究開発推進センター所属の教員に事務部代表を含む30名程度の委員から成ります。この委員会と高等教育研究開発推進センターが協力して、必要に応じて検討課題に対応したプロジェクトチームを立ち上げ、FD活動推進への取り組みを行っています。

主な活動

- FD関連情報の共有化と公開
- 各種FD関連情報の収集と提供
- 全学教育シンポジウム
- プレFD
 - ・大学院生のための教育実践講座
 - ・文学研究科プレFDプロジェクト
- 新任教員教育セミナー
- 部局FD活動ワークショップ・研修会等への連携・支援
- 勉強会

※他にも、高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた公開授業・検討会を、2008（平成20）年度からFD研究検討委員会の主催事業として年1～4回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。

2017年3月 京都大学FD研究検討委員会発行

京都大学のFDに関する取り組みについては、

FD研究検討委員会のホームページ

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。



京都大学のFD

2016

Mutual Faculty Development

